

【論文】

現代日本語の条件文の分析のための一考察

- 「～と」「～たら」「～ば」「～なら」を中心に -

宮 部 真由美

A Study on the analysis of Conditionals (to, tara, ba and nara)
in the Japanese language

MIYABE, Mayumi

要旨：これまで条件文に関して多くの研究が行われ、一定の成果が出ているといえる。しかし、筆者は今一度、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式について、個別の分析を行い、これらの形式間の違いについて考えてみたい。その際、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式について、できる限り、同一の環境において分析を行いたい。本稿では、こうした分析を進める上でどのような観点が必要であるかを提示する。

「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が用いられた文をみていくと、<文の通達的なタイプ>の違いや、<時間的限定性>の有無、<文の時間的な位置づけ>、<従属節のモーダルな意味>、<従属節と主節との関係>といった点が、これらの形式を分析していくための観点として重要であることがわかった。本稿では、こうした点について、用例を挙げながら具体的に記述していく。

キーワード：条件文、文の通達的なタイプ、時間的限定性、
文の時間的な位置づけ、モーダルな意味

0 . はじめに

これまで、条件文について、多くの研究がおこなわれてきた。特に、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の4形式が用いられた文については、多く

の研究があり、代表的な条件表現形式であるといえる¹⁾。

こうした条件表現に関する研究には、個々の形式に関する個別的な研究もあれば、いくつかの条件表現を体系的にとらえようとする研究もある。また、分析の観点もさまざまである。例えば、事実性の観点や、前件と後件の関連性の観点、一回性が多回性かといった観点、話し手の視点という観点、主節にどのような通達的なタイプやモダリティ形式が現れるかという観点、語用論的な観点、認知科学的な観点などである。

こうした一連の研究により、個々の条件表現については十分な成果が得られているといえる。しかし、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の4形式の条件表現がどのような関係にあるのかという点に関して、それぞれの形式の個別的な分析を同一の環境において行った上で関係を述べたものは少なく、まだ議論の余地がある。

筆者は、修士論文(『現代日本語の条件文の研究』横浜国立大学大学院教育学研究科、1997年1月提出)において、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」などの各形式について、個別的な分析を行い、それぞれの形式について類似点や相違点などを明らかにしようとした。筆者は今一度、この修士論文を土台に、研究対象や理論面について、再度、考察を加え、代表的な条件表現形式である「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式について、できる限り、同一の環境において、これらの形式間の違いについて考えてみたい。そして、4形式がどのような関係で存在しているのか体系的にとらえられるようにしたい。本稿では、そうした特徴を明らかにするための分析を進めていく上で、どのような観点により、これらの形式をできる限り同一の環境で分析していくのかということについて述べていく。

以降では、条件を表わす用法に関わらず、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が用いられている文について、これらを分析するためにどのような観点が必要であるか考えていきたいと思う。

1. 分析対象と、文の分類、テキストのタイプ

分析の対象とする構文は、動詞の条件形でかつ、肯定形、つまり、「～すると」「～したら」「～すれば」「～するなら・したなら」の構文に限ることにする。「～しないと」「～しなかったら」「～しなければ」「～しないなら・しなかったなら」の動詞の否定形の条件形のものは、別に分析した方がよいと考えられるため、本稿での用例としては除いておき、改めて取り上げることとする²⁾。名詞述語や形容詞述語の条件形は、動詞の条件形と同じように分析できる部分もあるが、名詞や形容詞が述語となる場合は動詞とは語彙的、文法的に異なるカテゴリーを持つため、今回は分析の対象とはしないことにする。「～なら」は、直接名詞に接続するが、これについても今回は分析の対象とはしないこととする³⁾。

また、分析の対象とする条件文は、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が用いられていても、従属節が主語を取ることができず、状況節的な用いられ方をしているものや、慣用的ないい方になっているもの、後置詞化しているもの、モダリティーの表現形式となっているもの(「～すればいい」「～したらいい」など)は、分析の対象とはしない。

条件文の分析にあたり、用例は作例ではなく、小説などのテキストから採集した。小説は、地の文と会話文とからなり、分析はそれぞれについておこなうが、基本的には会話文の用例を記述していくことにする。

条件文は、文の通達的なタイプの違いにより、用いられる形式が異なる場合がある。まずは、文の分類から確認していく。

1.1. 文の通達的なタイプ

「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が用いられた文(従属節と主節との合わせ文)がどのような通達的なタイプであるかという点を確認しておかなければならない。

奥田靖雄(1996)によると、文の対象的な内容としてのできごとには、《私》

にとって一体それがなにかという、現実の世界に対する《私》の關係の仕方が常につきまとっているという。つまり、文の对象的な内容は、常に《私》の観点からなんらかの意味づけをうけており、この意味づけを「モーダルな意味」という。そして、奥田靖雄(1996)は、文をモーダルな意味の観点から次のようにわけている。

表 1 奥田靖雄(1996)の文の分類

・平叙文	現実性の確認としての平叙文 可能性の確認としての平叙文 必然性(必要)の確認としての平叙文
・命令文	絶対的な命令をいいあわす命令文 依頼をいいあわす命令文 勧誘をいいあわす命令文 禁止をいいあわす命令文
・希求文	話し手の、自分自身の動作に対する欲求 第三者の、これからの動作の実現への話し手の期待
・疑問文	命令あるいはさそいかけの意味あいをとまなうところの、疑問文 問題提起の疑問文 いわゆる詠嘆の疑問文

本稿では、表1の奥田靖雄(1996)の文の分類を参考にして分析を進めることにするが、以下の点に注意しておきたい。まず、「疑問文」は分析の対象とはしない。これは採集された用例が少なかつたため十分な分析ができなかつたからである。それから、「希求文」について、奥田靖雄(1996)も「平叙文や命令文などとならべて、モーダルな意味の観点からの、独立した文のタイプと認めることができるか、まだ疑問がのこる」と述べており、また分析をする上で「希求文」という分類が必要ではなかつたこともあり、一つの項目として立てないことにする。「希求文」は、今回の分析では「平叙文」に分類して分析を進めることにした⁴⁾。そして、「命令文」であるが、

この用語は単に「命令」だけを表わしていると誤解されるおそれがあるので、本稿では「実行文」と呼ぶことにしたい。「実行文」には、命令・依頼・勧誘・意志などを表わす文が含まれる⁵⁾。

表2 本稿の文の分類

文の分類	{ <ul style="list-style-type: none"> ・平叙文 ・実行文
------	--

<平叙文>は確認のモダリティー、<実行文>は話し手の積極的な態度（命令・依頼・勧誘・意志など）を表わすモダリティーを持つ文である。ここで、<平叙文>と<実行文>に分けたが、<平叙文>には、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が用いられていれていたが、<実行文>には「～たら」「～なら」の形式しか用いられていなかった⁶⁾。次の(1)、(2)、(3)が<実行文>に用いられた用例である。

- (1) 「どういうふうに奇妙なの？」
 「会ってみりゃ、わかるよ。それよか、荷物おいたら、庭へおい
でよ。お茶を飲む時間だから」
 「よし行こ。君んちの紅茶はうまいからな」(太郎物語 155)
- (2) 「二十八よ。あたいの兄の嫁なんだ。あたいを毛嫌いしてさ」
 「恨んでるんだね」
 「ねえ、やる気ある？」
 「お前が協力してくれるなら、やってもいいぜ。いっしょにすん
 でいるのか？」
 「いっしょじゃないわ。兄達は、あたいの家からちょっと離れた
 アパートにいるのよ。あんた、あたいの名をおぼえてといてよ。ト
 シ子というのよ」(冬の旅)
- (3) 「市川さんも水野さんも喜んでますよ。加藤文太郎といえば、
 わが国登山界の第一人者ですよ。その加藤さんと一緒に歩けるな

どということは光栄です」

「そういっていたのか」

「いや、彼等は遠慮していましたが、私がそういつてすすめたの
です」

宮村は得意顔でいった。

「そう決ったなら そうしよう」

加藤は、顔に現われようとする不満をかくすために、いそいで眼
を地図の上に落した。(孤高の人)

1.2. テキストのタイプ

本稿の分析では、用例を主に小説から採集した。小説というテキストは、
<会話文(話し合いのテキスト)>と<地の文(かたりのテキスト)>か
ら成っている。<地の文(かたりのテキスト)>の分類については、工藤
真由美(1995)が詳しく、「地の文は、大きくは、外的出来事の提示部分と、
作中人物の内的意識世界の再現部分の、2つのテキスト部分からなってい
る」(p.192)と述べ、表3のように小説の内部構造をわけている。

表3 工藤真由美(1995)による小説の内部構造

物語世界	・地の文	<かたり>	外的出来事の提示
		<内的独白>	作中人物の内的発話の直接的再現
	・会話文<はなしあい>		作中人物の外的発話の直接的再現

工藤真由美(1995)は、地の文の<内的独白>部分について、「テンス形式、
時間副詞は、作中人物の<心理活動=内的発話活動のいま>を基準軸とし
てダイクティックに使用されていて、会話文<はなしあい>における場合
と同じである」(p.192)と述べている。そして、三人称小説の地の文を典型
的<かたり>のテキストであると、主たる時制形式に過去形が非ダイク
ティックに用いられるが、<内的独白>は会話文における場合と時間構造

が同じで、過去形も非過去形もダイクティックに使用され、〈かたり〉のテキストには入らないとしている。

地の文において、個別的・一回的な物語世界の外的なできごとを提示するのではなく、反復的なできごとを表わす部分は、テキストの機能が〈背景の説明性＝解説性〉となるとし、工藤真由美(1995)は地の文の内部構造を表4のようにわけている。

表4 工藤真由美(1995)による小説の地の文の内部構造

地の文	{	<ul style="list-style-type: none"> ・ 外的出来事の提示部分 < 典型的かたり > ・ 内的意識の提示部分 < 内的独白 > / < 描出話法 >⁷⁾ ・ 解説部分
-----	---	---

本稿では、今回、用例を採集した際、「～と」に関して、〈話し合いのテキスト(会話文)〉と〈かたりのテキスト(地の文)〉というテキストの違いによって、用例の数が、他の形式とは明らかに異なる出方をした⁸⁾。この点も含め、〈話し合いのテキスト〉と〈かたりのテキスト〉とは異なるものであると考えられるため、わけて分析を進めることにする。

本稿では、次のように「外的出来事の提示部分」を〈物語世界のできごとと描写〉、「内的意識の提示部分」を〈作中人物の内的独白〉と呼ぶことにし、表5のようにテキストの違いを考慮して分析していく。「解説部分」は、時間的限定性を受けない部分なので、本稿の分析においては、この部分のテキストの違いは大きく問題とならない。

表5 本稿の小説の内部構造の扱い

・ 会話文(話し合いのテキスト)	
・ 地の文(かたりのテキスト)	{
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 物語世界のできごと描写 ・ 作中人物の内的独白

また、地の文は<一人称小説の地の文>の場合と<三人称小説の地の文>の場合がある。このテキストの違いによって、「～と」と「～たら」の場合に、一部分であるが違いがある。<一人称小説の地の文>と<三人称小説の地の文>との違いによって、異なる結果となる点に関しては、「～と」と「～たら」の形式の個別的分析の際に述べることにする。

このように、<話し合いのテキスト>と<かたりのテキスト>とを区別して分析することは、広い意味でコンテキストを考慮した分析であるといえる。

そして、<話し合いのテキスト>にしる、<かたりのテキスト>にしる、そこでの「発話(文)」はその発話(文)だけを見ても正確には理解できない。どのような場面や状況で発話されたものであるか(語られた文であるか)前後の文脈を考え、その発話(文)について分析しなければならない。例えば、(4)の「飲みながらやると、振り込むぞ」という発話は、これを単独でみると<一般的・普遍的なできごと>もしくは<反復的・習慣的なできごと>ととらえることができるだろう。しかし、(4)の文脈の中では、発話者が相手のそのときの様子を見て発話した<個別的・一回的なできごと>である。このように、条件文の分析にはコンテキストを考慮した分析が必要であるといえる。

(4) 亜矢子はさすがに面白くないと見えて、

「葉ちゃんが飲むのは勝手だけど、飲みながらやると、振り込むぞ」といった。

もともと昼間の下地がある上に、空き腹へ手酌でぐいぐいやったので、それから一時間ほどの間に、葉子はすっかり酔ってしまった。

(花影 76)

2. 分析の観点

2.1. 時間的限定性の有無

文の通達的なタイプが<平叙文>の場合には、時間的限定性の有無が問題になってくる。特に、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が用いられた文（従属節と主節との合わせ文）について分析する際には、そこにえがきだされるできごとが、時間のなかに現象するできごとであるか否か、つまり、時間的限定性を受けるか受けないかという点が重要である。

本稿では、時間的限定性の有無によって、文がどのようなできごとを表わしているかということについて、表6のように分類した。

表6 時間的限定性による分類

・時間的限定性：あり	・個別的・一回的なできごと
・時間的限定性：なし	<ul style="list-style-type: none"> ・反復的・習慣的なできごと ・一般的・普遍的なできごと

これは奥田靖雄(1996)を参考に分類した。<個別的・一回的なできごと>は、奥田靖雄(1996)では「いちいちの具体的な出来事」にあたる。<習慣的・反復的なことがら>は「反復的なできごと」、<一般化・普遍的なできごと>は「一般化された出来事」にあたる。奥田靖雄(1996)では、本稿の<習慣的・反復的なことがら>を、「反復的な出来事」と「習慣的な出来事」とに区別しているが、採集した用例において、「反復的な出来事」と「習慣的な出来事」とがはっきりと区別できない場合が多かったため、本稿ではまとめて扱うことにした。下に用例を挙げる。

<個別的・一回的なできごと>

「～と」「～たら」「～ば」「～なら」のすべての形式が現れる。

- (5) 「どうだか、わかりません」

宏は顔を赤くして、また下を向いた。

「どうです、そこを少しはっきり言ってみては 言いにくいのはわかるけれど、はっきり言ってくれると、君の過失について（菊池はこの『過失』という言葉に、力を入れた）真実がわかってくるんだがね どうだろう。ハツ子はその時、きみにもっと積極的に、例えば、あたしといっしょに逃げよう、とでも言ったのじゃないかね」（事件 415）

- (6) 「ああ、オレは定期券持って通学したいよう」

太郎は喚いた。

「いつまで経っても、テクだぜ。越境組はかっこいいわア。定期券持ってさあ、定期ありゃ釣堀いくのもタダだしなア」

「高校へ行ったら、多分定期持てる」

山本正二郎は一言で片づけた。（太郎物語 9）

- (7) 「兄さんだけのことじゃない。僕と兄さんと二人で引き起こした事件ですよ。当分はいろいろの見方をされるでしょうが、しかし、問題は徐々に簡単なものになっていくと思います」

魚津が言うと、

「そうでしょうか」

心配そうな表情でかおるは言った。

「雪が解け始めたら、すぐ山へ行くつもりでいます。兄さんの死体が出れば、半分の疑惑は解決しますよ。ザイルは体に巻きつけているでしょうし、遺書も、遺書めいたものも出ないでしょう」（氷壁 305）

- (8) 「どうすればいいのだね、金川」

「うん、まあ、そういうふうに話を持ちかけてくりゃあ、おれだって、別にいきり立って、ものをいうこともないのさ。実はな加藤、園子がいったと思うが、あの小僧につきまとわれていると商売に影響するんだ。はっきりいって、今後いっさい近よってもらいたくな

い。年上の女に可愛がられたその味が忘れられねえで寄って来るあの小僧の気持がわからねえでもねえが、これ以上つきまとして来るなら、ほんとうに痛い目に会わせてやることになるだろう。ほんとうは、あの小僧が悪いのじゃねえ、あの小僧を宝塚へ引きずり込んだ園子の奴が悪いのだが、園子の方には、いまのところわざと知らんふりをしてやっているのさ。(孤高の人)

- (9) 「ああ、姉のことを思うと、とり返しをつかない、すまない気がするよ。その時僕は十六だったから何も知らなかった。今の僕なら少しは姉の力にもなれたと思うがね」

「一たい他人の意志で結婚するのはまちがっているね。こないだ僕は往来を歩いてこんなことを考えたよ。自分で人を殺したなら自分で責任をもつ、しかし他人が殺した責任をもらされてはたまらない。結婚でもそうだ。自分で結婚したなら責任をもつ、いくら親でも他人の意志で結婚させられてはたまらないって」(友情)

<反復的・習慣的なできごと>

「～と」「～ば」の形式の用例しか現れなかった。「～たら」「～なら」の用例は採集されなかった。次の<一般的・普遍的なできごと>の場合も同様であった。

- (10) 「ぼくなんかだつて、そうですよ。雨が降ると、いろんなところがかゆくなるしな。頭とか、背中とか、足の裏とか」

「ほんとに、雨が降ると、かゆいの？」

「かゆいです」(太郎物語 84)

- (11) 「デートしてるの？」

と信子は尋ねた。

「してるよ。競技場その他でね。会えば おはよう、って言うもんね」(太郎物語 243)

<一般的・普遍的なできごと>

<反復的・習慣的なできごと>の場合と同様に、「～と」「～ば」の形式の用例しか現れなかった。「～たら」⁹⁾「～なら」の用例は採集されなかった。

(12) 「ほら、三本とも燃えたわ」

満典も真似てやってみたが、いつぞやのバシリと同じように、一本目で灰皿に落ちた。

「手品のタネは、蠟の量よ。溶ける時間もないくらい少なくするの。少ないとマッチの棒をつなげないし、多いと、火が移るまでに溶けるわ。でも多すぎると、きっとこのゲームは成立しないのね。三本のマッチを一本の蟻で固めたら、誰でも簡単に出来るもの」(海辺の扉・上 197)

(13) 「この雪はまだ、根雪にはならないな」

「はあ、多分・・・」

「たとえ雪は二メートル降っても、惇一君、春がくれば 融けるよ。だがね、人間の心に積もった雪は・・・悲しみは、苦しみは、恨みは、春が来たからと言って、融けやしない」

惇一は答えようがなかった。(あのポプラの上が空 339)

以上から、<個別的・一回的なできごと>、つまり、時間的限定性がある場合には、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」のいずれの形式も用いられるが、<反復的・習慣的なできごと>、<一般的・普遍的なできごと>のような時間的限定性がない場合は、基本的に「～たら」「～なら」の形式は用いられず、「～と」「～ば」の形式が用いられることがわかる。

2.2. 文の時間的な位置づけ

「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が用いられた文が、時間的限

定性を受ける場合、つまり<個別的・一回的なできごと>について述べられる場合、そこに述べられる具体的なことがらは時間の流れの上に配置され、過去、現在、未来という時間的な位置づけができるはずである¹⁰⁾。分析では、条件文に述べられていることがらが「過去 - 現在 - 未来」のどこに位置づくのかをみていくのであるが、直接的にはそのことがらが発話時において成立しているか否か（成立 - 非成立）という点が重要である。

合わせ文に<非成立のことがら>を表現

合わせ文に<成立していることがら>を表現

文の時間が分析の観点に関わってくるのは、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式（特に、「～と」「～たら」）が、必ずしも条件を表わす文に用いられるわけではないからである。上のうち、合わせ文に<成立していることがら>を表現している文は、従属節と主節との間に因果関係性があるものもあるが、従属節が条件を表わさない場合もあり、純粋な条件文とは離れた位置にあるといえる（詳細は、2.4を参照してほしい）。

まずは、条件文に述べられていることがらが、発話時において成立しているか否か（成立 - 非成立）という点による分類をみてほしい。

合わせ文に<非成立のことがら>を表現

いわゆる「仮定条件文」と呼ばれるものにあたる。「～と」「～たら」「～ば」「～なら」のいずれの形式も現れる。そして、従属節に述べられることがらをどのようなものとしてとらえているかという観点から下位分類できる（従属節の下位分類は2.3で述べる）。

(14) (5)の再掲

「どうだか、わかりません」

宏は顔を赤くして、また下を向いた。

「どうです、そこを少しははっきり言ってみては 言にくいのはわかるけれど、はっきり言ってくれると、君の過失について（菊池はこの『過失』という言葉に、力を入れた）真実がわかってくるんだがね どうだろう。ハツ子はその時、きみにもっと積極的に、例えば、あたしといっしょに逃げよう、とでも言ったのじゃないかね」（事件 415）

(15) (6)の再掲

「ああ、オレは定期券持って通学したいよう」

太郎は喚いた。

「いつまで経っても、テクだぜ。越境組はカッコいいわア。定期券持ってさあ、定期ありゃ釣堀いくのもタダだしなア」

「高校へ行ったら、多分定期持てる」

山本正二郎は一言で片づけた。（太郎物語 9）

(16) (7)の再掲

「兄さんだけのことじゃない。僕と兄さんと二人で引き起こした事件ですよ。当分はいろいろの見方をされるでしょうが、しかし、問題は徐々に簡単なものになっていくと思います」

魚津が言うと、

「そうでしょうか」

心配そうな表情でおるは言った。

「雪が解け始めたら、すぐ山へ行くつもりでいます。兄さんの死体が出れば、半分の疑惑は解決しますよ。ザイルは体に巻きつけているでしょうし、遺書も、遺書めいたものも出ないでしょう」（氷壁 305）

(17) (8)の再掲

「どうすればいいのだね、金川」

「うん、まあ、そういうふうに話を持ちかけてくりゃあ、おれだって、別にいきり立って、ものをいうこともないのさ。実はな加藤、

園子がいったと思うが、あの小僧につきまといわれていると商売に影響するんだ。はっきりいって、今後いっさい近よってもらいたくない。年上の女に可愛がられたその味が忘れられねえで寄って来るあの小僧の気持がわからねえでもねえが、これ以上つきまといに来るなら、ほんとうに痛い目に会わせてやることになるだろう。ほんとうは、あの小僧が悪いのじゃねえ、あの小僧を宝塚へ引きずり込んだ園子の奴が悪いのだが、園子の方には、いまのところわざと知らんふりをしてやっているのさ。(孤高の人)

(18) (9)の再掲

「ああ、姉のことを思うと、とり返しのつかない、すまない気がするよ。その時分僕は十六だったから何も知らなかった。今の僕なら少しは姉の力にもなれたと思うがね」

「一たい他人の意志で結婚するのはまちがっているね。こないだ僕は往来を歩いてこんなことを考えたよ。自分で人を殺したなら自分で責任をもつ、しかし他人が殺した責任をもたされてはたまらない。結婚でもそうだ。自分で結婚したなら責任をもつ、いくら親でも他人の意志で結婚させられてはたまらないって」(友情)

合わせ文に<成立していることがら>を表現

合わせ文に<成立していることがら>を表現している場合には、「～と」「～たら」の形式しか用いられていなかった。「～ば」「～なら」の形式の用例は採集されなかった。

合わせ文に<成立していることがら>を表現している場合も、従属節にどのようなできごとが述べられているかという観点から下位分類できる(2.4で述べる)。

(19) 「まだ早いし、今朝は休んだらいい」

「そろそろ動いている方がいいんです。新聞を取りに出て、冷

たい風にあたると、よくなりました。女の鼻血は、心配ないって、
言いますわ」(山の音 137)

(20) 彼はバスで駅まで行き、母に電話をかけ、

「厄介な病気じゃないってわかったら、胃の調子も急によくなっ
たよ」

と言った。そして、これから東京へ出て、根岸の就職の件を頼んでみるつもりだと伝えた。(海辺の扉・下 76)

これまでの研究において、文の時間(テンス)はムードとの相関性が強いことはすでに指摘されており、工藤真由美(1995)は、ムードとの関係から、テンスについて、「客観的な時間的位置の相違ではなく、<話し手の立場>からの出来事の時間的な位置づけである」(p.49)と述べ、発話主体の心的態度の相違がむすびついているという。そして、「<未来>の出来事は、発話行為時において、まだ実現していない未定(irrealis)の出来事であるがゆえに、発話主体の<予期>という認識の仕方、あるいは<意志>という実践的態度とむすびついている。<現在>の出来事は、発話行為時において、アクチュアルに実現している出来事(realis)であるがゆえに、<知覚>という認識の仕方とむすびつきうる。そして、<過去>の出来事は、既にも実現した出来事(realis)であるがゆえに、<回顧(回想)>という認識とむすびつく」(p.48)と述べ、表7のように図示している。

表7 工藤真由美(1995)によるテンスの分類

ムード テンス	客観的ムード (存在のあり方)	主観的ムード (話し手の認識的態度)
未来	未定	話し手の予期(意志)
現在	既定(顕在)	話し手の知覚
過去	既定(非顕在)	話し手の回顧

このように文の時間とはモーダルな意味の側面からの分類であるともいえる。合わせ文に〈非成立のことがら〉を表現している文は、発話者の予測や推測が主節に述べられている。工藤真由美(1995)で、「実現していない未定の出来事」を、「発話主体の〈予期〉という認識」としてとらえられている部分が、条件文では「発話主体の〈予測や推測〉の表出」ととらえることができるだろう。合わせ文に〈非成立のことがら〉を表現している文は、条件文らしさの特徴が現れる文であるといえる。

このようなモーダルな意味の側面は、次の節以降で述べる従属節の分類にも関わっている。

2.3. 合わせ文に〈非成立のことがら〉を表現している場合の従属節のことがら

合わせ文に〈非成立のことがら〉を表現している場合の合わせ文の主節には、発話者の〈予測や推測〉が述べられる。従属節には主節で述べられる〈予測や推測〉にかかせない要件となることがらが述べられる。もしくは、従属節に述べられることがらから導かれる〈予測や推測〉が主節に述べられる。

この場合の従属節のことがらには、「まだ成立・実現していないことがら」、「事実として成立していることがらや現在の状態」、「実際には成立・存在しないことがら」をさしだすことができる。次のように分類できる。

従属節に〈未定のことがら〉を表現

従属節に〈既定のことがら〉を表現

従属節に〈事実に反することがら〉を表現

従属節に〈未定のことがら〉を表現

〈未定のことがら〉とは、「まだ成立・実現していないことがら」をさしだすものである。

従属節に<未定のことから>を表現する場合、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」のいずれの形式も用いられる。下に用例を挙げる。

また、この従属節に<未定のことから>を表現する場合は、下位分類できる(2.3.1で述べる)。

(21) (5)の再掲

「どうだか、わかりません」

宏は顔を赤くして、また下を向いた。

「どうです、そこを少しははっきり言ってみては 言にくいのはわかるけれど、はっきり言ってくれと、君の過失について(菊池はこの『過失』という言葉に、力を入れた) 真実がわかってくるんだがね どうだろう。ハツ子はその時、きみにもっと積極的に、例えば、あたしといっしょに逃げよう、とでも言ったのじゃないかね」(事件 415)

(22) (6)の再掲

「ああ、オレは定期券持って通学したいよう」

太郎は喚いた。

「いつまで経っても、テクだけ。越境組はカッコいいわア。定期券持ってさあ、定期ありゃ釣堀いくのもタダだしなア」

「高校へ行ったら、多分定期持てる」

山本正二郎は一言で片づけた。(太郎物語 9)

(23) (7)の再掲

「兄さんだけのことじゃない。僕と兄さんと二人で引き起こした事件ですよ。当分はいろいろの見方をされるでしょうが、しかし、問題は徐々に簡単なものになっていくと思います」

魚津が言うと、

「そうでしょうか」

心配そうな表情でかおるは言った。

「雪が解け始めたら、すぐ山へ行くつもりでいます。兄さんの死
体が出れば、半分の疑惑は解決しますよ。ザイルは体に巻きつけて
いるでしょうし、遺書も、遺書めいたものも出ないでしょう」(氷壁
305)

(24) (8)の再掲

「どうすればいいのだね、金川」

「うん、まあ、そういうふうに話を持ちかけてくりゃあ、おれだ
って、別にいきり立って、ものをいうこともないのさ。実はな加藤、
園子がいったと思うが、あの小僧につきまとわれていると商売に影
響するんだ。はっきりいって、今後いっさい近よってもらいたくな
い。年上の女に可愛がられたその味が忘れられねえで寄って来るあ
の小僧の気持がわからねえでもねえが、これ以上つきまとって来る
なら、ほんとうに痛い目に会わせてやることになるだろう。ほんとう
うは、あの小僧が悪いのじゃねえ、あの小僧を宝塚へ引きずり込ん
だ園子の奴が悪いのだが、園子の方には、いまのところわざと知ら
んぷりをしてやっているのさ。(孤高の人)

(25) (9)の再掲

「ああ、姉のことを思うと、とり返しのつかない、すまない気が
するよ。その時分僕は十六だったから何も知らなかった。今の僕な
ら少しは姉の力にもなれたと思うがね」

「一たい他人の意志で結婚するのはまちがっているね。こないだ
僕は往来を歩いてこんなことを考えたよ。自分で人を殺したなら 自
分で責任をもつ、しかし他人が殺した責任をもたされてはたまらな
い。結婚でもそうだ。自分で結婚したなら責任をもつ、いくら親で
も他人の意志で結婚させられてはたまらないって」(友情)

従属節に<既定のことから>を表現

<既定のことから>とは、「事実として成立・存在していることから

や現在の状態」をさしだすものである。

合わせ文が<非成立のことがら>を表現していて、従属節に<既定のことがら>を表現する場合は、「～と」「～たら」「～なら」¹¹⁾の形式が用いられていた。「～ば」の用例は採集されなかった。

(26) (4)の再掲

亜矢子はさすがに面白くないと見えて、

「葉ちゃんが飲むのは勝手だけど、飲みながらやると、振り込むぞ」といった。

もともと昼間の下地がある上に、空き腹へ手酌でぐいぐいやったので、それから一時間ほどの間に、葉子はすっかり酔ってしまった。

(花影 76)

(27) 「悪くない、となったら、安心して暴飲暴食しろよ。いつまでもお粥なんか食べ続けてたら、悪くない胃でもおかしくなっちゃうよ」

太郎は言い、母は、

「わかってる、わかってる」

と言った。(太郎物語 289)

(28) 「そんな事を真実と思うか」

「信じられぬと言うなら 仕方がないな。人間信じなくてもいい権利があるだろうからな」

左山の言葉は落着いていた。(あすなる物語)

(29) 柳は負けてしまったのではないだろうか。私は急き込むように訊ねた。

「それで、どうしました、柳は！」

「勝ったよ、どうにか」

タイトルを他のボクサーに持っていかれなかったことにホッとしたが、次にそれならどうして内藤と闘うことができないのか不思議

に思えてきた。

「勝ったなら、問題ないじゃないですか」

私は山県にいくら強く言った。(一瞬の夏)

従属節に<事実に反することがら>を表現

<事実に反することがら>とは、「実際には成立・存在しないことがら」をさしだしているものである。

従属節に<事実に反することがら>を表現する場合には、「～たら」「～ば」「～なら」¹²⁾の形式が用いられていた。「～と」の用例は採集されなかった。

(30) 「それにしてもよく乙彦に気づいたわね」

「他に大勢人がいたら、わからなかったかもしれない。でも、誰もいない坂道で正面から運命的にすれ違ったからね」(N・P 43)

(31) 「僕は信じない、君は旦那を取るなんて柄じゃないよ」

「あまり贅沢もっていられないのよ。そろそろ見切りをつけなくちゃね」

「それができれば、畑と結婚できたはずだった」

「邪魔したのは、あんただったわ」

「君が好きだったからね」(花影 143)

(32) が、惇一は、傍らで聞いていて、今の余里子の言葉は、きびし過ぎるのではないかと思った。しかし陶吉は、こともなげに笑って、

「当り！ 当りだ。神様がおいでなら、わしが一生の間にしたことを、決してお許しにはならないだろうな。だから、いて欲しくないのだよ」

と、盃を傾けた。那千子はその陶吉を不思議そうに見て、

「おかしな大先生、神様が怖いなんて・・・いもしない神様に、びくびくして・・・」

と、呆れたように言った。(あのポプラの上が空 81)

- (33) 峻一の飛行機熱は昔からのもので、その豊かな追憶を列記したなら、それはそのまま我が国の航空史にもつながるものであったろう。もとより初めは男の子が誰でも空を飛ぶ機械に抱く憧れと好奇の域を出ないもので、大正十二年、はじめて三菱の英人のテストパイロットが航空母艦鳳翔の着艦離艦に成功して賞金十万円を獲得したとき、峻一は八歳で、その十万円のほうに関心が深かった。
(榆家の人びと)

従属節に表現されている<未定のことから>とは「これから起こることがら(未来)」、<既定のことから>とは「現在起こっていることがら(現在)、すでに起こったことがら(過去)」であるともいえ、未来のことからであるか、現在・過去のことからであるか、という点からとらえることができるということを考えると、時間的な位置づけによる分類でもあるといえるだろう。従属節が<事実に反することから>の場合は、そこにえがきだされることがらは時間軸上には成立・存在しないことがらとしてとらえられる。

奥田靖雄(1986)や、その後の前田直子(2009)では、条件文の分析に「リアリティー」という観点をを用いる。前田直子(2009)は、リアリティーを「言語によって表わされた事態と、現実との事実関係」(p.18)と定義し、表8の3種があるとしている。

表8 前田直子(2009)のリアリティーの分類

リアリティー	{	仮定的リアリティー	{	仮説的リアリティー
		事実的リアリティー		反事実的リアリティー

前田直子(2009)は、リアリティーの観点から、複文の分類は「従属節

も主節もまだ成立していない事態、あるいは事実かどうか未確認の事態」(仮說的レアリティー)「実現しなかった事態、あるいは事実でないことが確認された事態」(反事實的レアリティー)「従属節も主節も実現したこと、あるいは事実であると確認されたこと」(事實的レアリティー)という点からとらえることができると述べている。

このレアリティーという観点による複文の分類は、実際的には、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が用いられている文(従属節と主節との合わせ文)や従属節に述べられることがらが時間的にどこに位置づくの、もしくは位置づかないのかを確認していくことにより可能であるともいえる。本稿では次のような下位分類をおこない、本稿の時点ではレアリティーという用語は使わないことにする。

合わせ文に<非成立のことがら>を表現

従属節が未定のことがら

- ・従属節がまだ起こっていないこと
- ・従属節が発話時点においてわかっていないこと、知らないこと

従属節が既定のことがら

従属節が事実に反することがら

合わせ文に<成立していることがら>を表現

従属節が既定のことがら

従属節が<未定のことがら>を下位分類したのは、実際にはすでに成立していることがらであっても話し手がまだ認識していないということもありうる(詳細は、2.3.1を参照してほしい)ため、上のような分類を行った。本稿では従属節にえがきだされることがらを話し手がどのようなことがらとしてとらえているかという観点から分類したものである。本稿の<未定のことがら>であるか、<既定のことがら>であるかというとらえかたや、<事実に反することがら>であるかというとらえかたは、話し手が

どのようなことがらとしてとらえているかというモーダルな意味の側面からの分類であるといえる。

2.3.1. 従属節に〈未定のことから〉を表現している場合の分類

従属節に〈未定のことから〉を表現している場合、さらに、話し手がどのようなものとしてさしだしているかという観点から下位分類できる。

起こっていないことがら

発話時点においてわかっていないことがら、知らないことがら

従属節が〈未定のことから〉の下位分類をみていくと、より、話し手がどのようなことがらとしてとらえているかというモーダルな意味の側面が関わっているということがわかる。以下に用例を挙げる。

従属節に〈起こっていないことがら〉を表現

「～と」「～たら」「～ば」「～なら」のいずれの形式も用いられる。

(34) (5)の再掲

「どうだか、わかりません」

宏は顔を赤くして、また下を向いた。

「どうです、そこを少しははっきり言ってみては 言いにくいのはわかるけれど、はっきり言ってくれと、君の過失について（菊池はこの『過失』という言葉に、力を入れた）真実がわかってくるんだがね どうだろう。ハツ子はその時、きみにもっと積極的に、例えば、あたしといっしょに逃げよう、とでも言ったのじゃないかね」（事件 415）

(35) (6)の再掲

「ああ、オレは定期券持って通学したいよう」

太郎は喚いた。

「いつまで経っても、テクだけ。越境組はカッコいいわア。定期券持ってさあ、定期ありゃ釣堀いくのもタダだしなア」

「高校へ行ったら、多分定期持てる」

山本正二郎は一言で片づけた。(太郎物語 9)

(36) (7)の再掲

「兄さんだけのことじゃない。僕と兄さんと二人で引き起こした事件ですよ。当分はいろいろの見方をされるでしょうが、しかし、問題は徐々に簡単なものになっていくと思います」

魚津が言うと、

「そうでしょうか」

心配そうな表情でおおは言った。

「雪が解け始めたら、すぐ山へ行くつもりでいます。兄さんの死体が出れば、半分の疑惑は解決しますよ。ザイルは体に巻きつけているでしょうし、遺書も、遺書めいたものも出ないでしょう」(氷壁 305)

(37) (8)の再掲

「どうすればいいのだね、金川」

「うん、まあ、そういうふうに話を持ちかけてくりゃあ、おれだって、別にいきり立って、ものをいうこともないのさ。実はな加藤、園子がいったと思うが、あの小僧につきまとわれていると商売に影響するんだ。はっきりいって、今後いっさい近よってもらいたくない。年上の女に可愛がられたその味が忘れられねえで寄って来るあの小僧の気持がわからねえでもねえが、これ以上つきまとって来るなら、ほんとうに痛い目に会わせてやることになるだろう。ほんとうは、あの小僧が悪いのじゃねえ、あの小僧を宝塚へ引きずり込んだ園子の奴が悪いのだが、園子の方には、いまのところわざと知らんふりをしてやっているのさ。(孤高の人)

(38) (9)の再掲

「ああ、姉のことを思うと、とり返しのつかない、すまない気がするよ。その時分僕は十六だったから何も知らなかった。今の僕なら少しは姉の力にもなれたと思うがね」

「一たい他人の意志で結婚するのはまちがっているね。こないだ僕は往来を歩いてこんなことを考えたよ。自分で人を殺したなら自分で責任をもつ、しかし他人が殺した責任をもたされてはたまらない。結婚でもそうだ。自分で結婚したなら責任をもつ、いくら親でも他人の意志で結婚させられてはたまらないって」(友情)

この<起こっていないことがら>は、次のような下位分類ができるかと考えられた。

{ 将来、起こるだろうということがら (もしくは、起こるかどうかわからないことがら)
将来、起こることが確実なことがら

<将来、起こるだろうということがら (もしくは、起こるかどうかわからないことがら)>の用例は、上で挙げた(34)~(38)がそれにあたる。<将来、起こることが確実なことがら>は、下の(39)のような例である。(39)では、<作中人物の内的独白>部分の発話者(独白者)が、<将来、起こることが確実なことがら>として発話(独白)している。

(39) 久治は鮫肝を切り終えると、調理場の奥の中皿を取りに行った。

大鍋の中では、南瓜が山吹色のやわらかそうな身を寄せ合っている。おろした大根が鉢の中に雪のようになったまま置いてある。

由紀子が戻れば 紅葉おろしをこさえる。

五年前なら、下準備が遅いと平気で由紀子を怒鳴りつけていた。

それが近頃は間に合えばいいと思うようになった。(受け月 116)

しかし、<起こっていないことがら>の下位分類と考えられる<将来、起こるだろうということがら（もしくは、起こるかどうかわからないことがら）>と<将来、起こることが確実なことがら>は、あまりにも微妙な意味による下位分類である。<将来、起こることが確実なことがら>にあたると思われる用例の多くは、コンテキストを詳細にみていかなければその意味を読み取ることができないからである。また、そのようにして採集・分類された用例も数例であった。

一方、高橋太郎(1993)に、「～たら」の用法として、「予定的な条件をあらわすばあい」という分類がある。高橋太郎(1993)は「未来の個別的な条件のなかで、あるていど予定されているコトガラについては、条件というよりは、時間をあらわしているといったほうがよいばあいがある」(p.248)と述べ、次の用例が挙がっていた。

(40) 静、おれが 死んだら、この いえを おまえに やろう。(夏目漱石「こころ」)(高橋太郎(1993)p.248 より引用)

(41) むこうに ついたら、電話して くれ。(高橋太郎(1993)p.248 より引用)

(40)、(41)で述べられている、「人は死ぬ」ことや、「出発すれば到着する」ことは、予定されたことがらといえる。他にも、例えば、3歳の子供が来年、4歳になることや、小学校六年生の子どもが3月に卒業することなどのように、時間の経過によって必然的に起こり得るできごとは、常識的に考えると、予定されたことがらであるといえる。しかし、本稿の時点では<起こっていないことがら>に分類しておき、「～たら」によって時間的な関係がさしだされるのではないかという点に関しては、「～たら」の形式について分析する際に述べていきたい。

以上より、本稿で先に述べた<起こっていないこと>の下位分類や高橋太郎(1993)の「予定的な条件をあらわすばあい」の分類は本稿では立てな

いことにする。

また、高橋太郎(1993)では、「予定的な条件をあらわすばあい」は、「～たら」の用法であるとしている。そして、用例(本稿の(40)(41))も、主節の述語が<実行文>であるものが挙げられていた。このため、構文的に「～と」や「～ば」の形式が用いられた文の用例には出てこないといえる。しかし、「～なら」の形式が用いられた文は、主文の述語に<実行文>をとることができるが、「～なら」にはこのような用法がないのであろうか。次の(42)はコンテキストを考慮すると、高橋太郎(1993)の「予定的な条件をあらわすばあい」であるといえそうである。おそらく、「～するなら」「～したなら」の場合には、高橋太郎(1993)がいう予定的な条件をあらわすことがありそうであるが、先にも述べたように「～なら」形式が用いられた文は、他の形式とは別の観点からの分析が必要であると考えられ、この点を含め、「予定的な条件をあらわすばあい」という分類について、改めて、「～たら」「～なら」の形式について分析する際に再考したいと思う。

- (42) つい最近にも、紺野の両親が東京見物に来たいとよこした手紙が紺野から須賀へ、須賀から行友へと取次がれて、早速、邸を宿にしてよんでやろうということになった。

「田舎ものので、女中さん達に笑われると僕が恥ずかしいから・・・」

と紺野はしきりに辞退してみせるのを、行友は叱るようにすすめて立てて招ばせた。

「東京見物をするなら、須賀も従って行ってやれ。休業中の紺野一人では二親も気兼ねがあるだろう」

と、手文庫から多分の金を出して渡した。(女坂 150)

次に、従属節が<発話時点においてわかっていないこと、知らないこと>を表わす場合の用例を挙げる。

<発話時点においてわかっていないこと、知らないこと>

「～たら」「～ば」「～するなら」の形式の用例しか現れなかった。「～と」「～したなら」の用例は採集されなかった。

(43) 「でも、おぼえてる。懐かしいわ。ねえ、もうあがれるの？ ご飯食べに行かない？ もし予定がなかったら」(N・P 41)

(44) 「小説？」

「ルポルタージュだろうな。俺に才能があれば、つまんねエ小説よりも深い杭が打てる」

「杭って、どういう意味？」

「こわれかけている世界を直すための杭さ」(葡萄と郷愁 129)

(45) 「つぐみちゃんも時間があるなら、ここにすわって海を見ておいで」

「あいかわらず下司な冗談を言う男だなあ、よし、ちょっとすわっていくか。気がはやって早く出てきちまったからな」

つぐみはそう言って、ビニールシートにべたりとすわり、まぶしそうに海を見た。(TUGUMI 128)

2.4. 合わせ文に<成立していることがら>を表現している場合の従属節のことがら - 因果関係性と時間関係性

合わせ文に<成立していることがら>を表現している文には、<予測や推測>は述べられない¹³⁾。この合わせ文は、2.3でも述べたような、いわゆる条件文(仮定条件文)というものが主節に発話者の<予測や推測>が述べられる文であると考え、条件文とは離れた位置にある文であるといえる。

合わせ文に<成立していることがら>を表現する場合、従属節も<既定のことがら>が述べられている。この従属節にさしだされることがらが、主節にさしだされることがらに対してどのような関係にあるかによって分

類を行った。特に、従属節と主節の間の〈因果関係性〉の有無と、因果関係がない場合は〈時間関係性〉の観点から下のように分類した。

また、ここで用いられる形式は、「～と」と「～たら」の形式のみである。「～ば」「～なら」の形式は用いられない。

因果関係性：あり	・契機的な関係を表わすもの
因果関係性：なし	・時間関係だけを表わすもの
	┌・継起的な時間関係を表わすもの
	└・同時的な時間関係を表わすもの

合わせ文に〈成立していることがら〉を表現する文のうち、〈時間関係だけを表わすもの〉の場合、さらに〈継起的な時間関係〉であるか、〈同時的な時間関係〉であるかから分類できる。〈継起的な時間関係を表わすもの〉は、「～と」の形式しか用いられておらず、「～たら」の形式の用例は採集されなかった。

下に用例を挙げるが、従属節が〈契機的な関係を表わすもの〉、〈継起的な時間関係を表わすもの〉、〈同時的な時間関係を表わすもの〉は、先行研究では、「きっかけ」、「連続」、「発見」などのように呼ばれているものである¹⁴⁾。本稿では、これらについて、〈きっかけ〉、〈連続〉、〈認識・発見の状況〉という用語を使うことにする¹⁵⁾。

これらの分類に対しては〈因果関係性〉と〈時間関係性〉という観点だけではなく、構文的特徴もみられる。これについては、あとの表9で示す。

従属節が〈契機的な関係を表わすもの〉 - 〈きっかけ〉

「～と」「～たら」の形式が用いられている。

(46) (19)の再掲

「まだ早いし、今朝は休んだらいい」

「そろそろ動いている方がいいんです。新聞を取りに出て、冷たい風にあたると、よくなりました。女の鼻血は、心配ないって、言いますわ」(山の音 137)

(47) (20)の再掲

彼はバスで駅まで行き、母に電話をかけ、

「厄介な病気じゃないってわかったら、胃の調子も急によくなったよ」

と言った。そして、これから東京へ出て、根岸の就職の件を頼んでみるつもりだと伝えた。(海辺の扉・下 76)

< 継起的な時間関係を表わすもの > - < 連続 >

「～と」の形式のみ用いられていた。「～たら」の用例は採集されなかった¹⁶⁾。

- (48) 「アメリカの話ですがね。ニュウヨク州のバッファロというところでね、バッファロオ……。一人の男が自動車事故で、左の耳を落としてね、医者へ行ったんです。医者はいきなり表へ飛び出して、現場に駆けつけて、血まみれの耳をさがして、拾って帰ると、その耳を傷あとにくっつけたんですって。その後今まで、具合よくついているそうですよ」(山の音 316)

< 同時的な時間関係を表わすもの > - < 認識・発見の状況 >

「～と」「～たら」の形式が用いられている。

- (49) 僕はコーヒーの残りを飲み干し、それからどうしたものか少し迷ってからやはり思い切って質問してみることにした。

「こういう立ち入ったことをうかがうのは失礼かもしれませんが、彼女のことで何かあったんですか？ お話をうかがっていると、どうももうひとつしっくりこないところがあるんですが」(回転木馬の

デッド・ヒート 94)

(50) 五月さんはもう一度涙ぐみそうになったが、それをこらえるのに成功したようだった。

「実はね、さっき、私がちょっと夕飯のお菜を買いに出て、帰って来てみたら、ガスの臭いがしてるの」

五月さんは囁くような、小声で言った。(太郎物語 72)

合わせ文が<成立していることがら>を表現する場合は、上でも述べたが、従属節と主節のことがらとの間の<因果関係性>という点と<時間関係性>の点により分類ができる¹⁷⁾。さらにみていくと、従属節と主節の<主体の異同>や、動詞の形態論的な形が<完成相>か<継続相>であるかという点もこの分類に関わっている。この構文的な特徴は、<因果関係性>と<時間関係性>の意味的な分類と相関関係にある。まとめると表9のようになる。

表9 合わせ文が<すでに成立していることがら>を表わす場合の分類

	因果関係性	時間関係性	主体の異同	アスペクト
契機的な関係を表わすもの <きっかけ>	あり		異なる主体	
継起的な時間関係を表わすもの <連続>	なし	継起的	同一主体	完成相+完成相
同時的な時間関係を表わすもの <認識・発見の状況>	なし	同時的	異なる主体 同一主体	完成相+継続相 継続相+完成相

アスペクトは、できごと間の時間関係(継起、同時)を示す機能を持っている。工藤真由美(1995)によると、「話し手が、複数の出来事を1つの事件としてまとめあげながら伝達するとすれば、その複数の出来事成立の時間的順序性を表し分けなければならない。スル(完成相)は、時間的に限界づけて把握するがゆえに<継起性>を表し、シテイル(継続相)は、時

間的に限界づけずに把握するがゆえに〈同時性〉を表す」(p.34)とある。「～と」、「～たら」の形式が用いられた合わせ文においても、こうしたことは成り立っている。表9にみられるように、〈時間関係性〉と完成相か継続相かというアスペクト形式は相関関係にある。

本稿の〈認識・発見の状況〉は、〈継続相〉で述べられるできごとが他のできごとに対して〈同時的〉な時間関係にある。工藤真由美(1995)では、テンス・アスペクト形式は、先でも引用したようにムードとの相関があり、「シテイル形式では、作中人物の知覚体験性が前面化する」(また、スル形式でも作中人物の知覚性を明示するために使用される場合があるとも述べられている)(p.199)とある。〈認識・発見の状況〉という用法は、こうした特徴を持つ合わせ文であることから、話し手や作中人物の知覚、体験、認識というムード的な意味を帯びるのであるといえる。

一方で、〈連続〉は、従属節においても、主節においても、述語動詞は〈完成相〉をとっている。工藤真由美(1995)によると、〈完成相〉をとることで〈継起性=時間の流れの前進性〉が前面化される。こうした点から、〈連続〉という用法は〈継起的な時間関係〉を表わすのであるといえる。

〈きっかけ〉は、〈連続〉や〈認識・発見の状況〉との関係において、時間関係性とアスペクトとが分類に関係ないので、表9の時間関係性とアスペクトの欄が空欄であるが、時間的な観点からみると、従属節のことがらに主節のことがらに直接的に働きかけており、従属節と主節の二つのことがらは近接して起こることがらである。アスペクトの点からは、〈きっかけ〉の用例のほとんどが「完成相+完成相」であった¹⁸⁾。

〈きっかけ〉の場合、従属節と主節の主体は異なる主体となる場合がほとんどであるが、同一主体の場合もあった。この場合、従属節や主節の述語との関係に特徴がある。表10に、従属節と主節の主体が〈異なる主体〉と〈同一主体〉の場合の下位分類を挙げ、その後それぞれの用例を挙げる。

表10 <きっかけ>の分類

従属節と主節の主体	従属節のことがら	主節のことがら
異なる主体	従属節の主体によることからの成立 (従属節の主体による意志的な動作や、無意志的な変化・動き)	主節の主体が意志的な動作を起こす
		主節の主体に無意志的な変化・動きが起こる
同一主体	従属節の主体による認知・思考活動	その主体による意志的な動作
		その主体による認知・思考活動
		その主体による無意志的な変化・動き
	従属節の主体によることからの成立 (従属節の主体による意志的な動作や、無意志的な変化・動き)	その主体による認知・思考活動
その主体による無意志的な変化・動き		

異なる主体：従属節の主体によることからの成立によって、主節の主体が意志的な動作を起こす場合

(51) 絹子は信吾の出した小切手を受け取った。

「あんたが、修一さんと別れてしまうのなら、いただいた方がいいかもしれないわ」と池田があっさり言うと、絹子もうなずいた。

(山の音 276)

(52) 富岡秀次郎が被告人席の宏に、複雑な感情をこめた視線を送っ

て退廷した後、廷吏が廊下へ向かって、

「証人、清川さん、中へ」

と呼ぶと、清川民蔵は、しっかりとした歩調で法廷に入って来た。

(事件 268)

異なる主体：従属節の主体によることからの成立によって、主節の主体に無意志的な変化・動きが起こる場合

(53) 「うふ、まあ、上がりゃいいじゃないか」

と高島は力なく笑い、天井から下がった電灯のスイッチをひねると、室内は甦ったように明るくなった。(花影 27)

(54) 「それからおじいちゃんが、カワハギが好きだから、お煮つけ用に一匹ちょうだいね」

「はい、はい」

魚友は、くわえ煙草で魚を作りにかかった。こきみいい手つきで、カワハギの皮をきゅっとむくと、下から鮮やかな、銀色がかったうす桃色の身が現われた。(太郎物語 153)

同一主体：従属節の主体による認知・思考活動により、その主体が意志的な動作を起こす場合

(55) 葉書と、切手を買っておこう、と太郎は思いつくと、郵便局の方へ歩いて行った。(太郎物語 301)

(56) 「うちの店を辞めたってこと、もう奥さんには話したの？」

「いえ。言いたしにくくて・・・」

水野は、典子が近くにいること、それも自分に話があって訪れたことを知ると、

「そこから動かないで下さい。歩いて五分ほどです。すぐに行きますから」

と言った。(花の降る午後 127)

同一主体：従属節の主体による認知・思考活動により、その主体が認知・思考活動をする場合

- (57) 葉子が新橋に着いたのは、六時を廻ったところだった。このまま店へ出てもいい時間だが、師走の街の慌ただしい人と車の行きか
いを見ると、急に疲れを感じた。それに今夜はどうせ畑が店へ来て、何かと返事をしなければならぬ、と思うと気が重かった。予定通り休むことにきめて、駅前からすぐタクシーに乗った。(花影 90)
- (58) 典子はワイパーを動かし、アヴニョンがつぶれたあとの、義母の余生を思った。蓄えはあるにしても、子も孫もない老後を想像すると、典子は自分がひどく冷酷な女みたいに思えてきた。(花の降る午後 239)

同一主体：従属節の主体による認知・思考活動により、その主体に無意志的な変化・動きが起こる場合

- (59) 男に限らず、合図が通じなかったことはなかったのだが、松子はしかしおびえたように、眼を伏せてしまった。
「あなたとあまり似ていないのね」
と畑の方を向いていったが、
「あたりまえさ、血がつながっているわけじゃないものな」
と畑が答えるのを聞くと、頬へ血が上がって来た。松子がスウェーターの肩を固くするのが見えた。(花影 63)
- (60) けれど、間もなく銀色のお盆を持ってやって来たウエイトレスが、五月さんだとわかると、太郎はまごまごした。(太郎物語 192)

同一主体：従属節の主体によることからの成立により、その主体が認識・思考活動をする場合

- (61) 「うん、しばらくだった」
と鸚鵡返しに答えて、カウンターに立つと、すぐその内側にか

がんで、伝票に書いている葉子が見えた。その背中のおあたかさを、松崎は感じた。(花影 155)

- (62) 「あの娘は十六だといいましたが、十八にはなっていますね、
そうして・・・生娘ではないと思いますよ」
といいにくそうにいった。まさかと思いながら、精しく問いた
すと 姉婿の職人と情事のあることがわかった。(女坂 23)

同一主体：従属節の主体によることからの成立により、その主体に無意志的な変化・動きが起こる場合

- (63) ふと風邪をこじらせて肺炎を起し、店をひと月近くも休んでいた時、アパートへしげしげと見舞いにきたのが縁で、なんとなくできてしまうと、葉子はそのままパー・クララへは出なくなった。今でこそ苦情を言いたてるけれど、最初はそうしてひっそり暮らすのを、むしろ喜んでいたのである。彼女は疲れていた。(花影 13)
- (64) 豊子は座るとすぐ口早に倫の言葉を取次いだ。病人のたわごととして話すつもりだったのが、言葉に出すと、倫がのり憑いているように真剣に上わずった声になった。(女坂 205)

このように<きっかけ>の分類をみていくと、従属節と主節の述語動詞が<意志動詞>であるか、<無意志動詞>であるか、<認知・思考活動を表わす動詞>であるかという動詞の語彙的な意味が分類に関係している。

<連続>の場合の述語動詞は従属節も主節も<意志動詞>で、従属節と主節が<同一主語>であるというのが特徴である¹⁹⁾。

最後に、<認識・発見の状況>について、表9では、従属節と主節に現れる述語動詞に注目して、その形態論的な特徴を挙げたが²⁰⁾、主節の述語に現れるのは動詞だけではなく、下の用例のように、名詞述語や形容詞述語の場合もあった。

(65) 信吾は急に動悸が早くなった。

「あっ」と胸をおさえた。心臓に発作が来たかのようなだった。

それでははっきり目がさめると、犬ではなく、人間のうなりごえだった。首をしめられて、舌がもつれている。信吾は寒けがした。誰かが危害を加えられている。(山の音 147)

(66) 次の火曜日、バー・クララへ行くと、葉子の顔色は目立って悪かった。松崎がすすめるハイボールにも、手を出さなかった。(花影 164)

3.まとめ

「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が用いられた文についての分析では、まず<文の通達的なタイプ>の分類が重要である。<平叙文>にはすべての形式が現れるが、<実行文>には、基本的には「～たら」「～なら」の形式しか現れない。

<平叙文>の場合、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式の分析には、さまざまな観点が必要である。表 11 にまとめたものを挙げる²¹⁾。

この表には、<テキストのタイプ>が組み込まれていないが、<テキストのタイプ>はこの表の全般にわたって影響している。「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の各形式についての個別の分析の際、また各形式の比較をする際に、どのようであったか記述していきたいと思う。

表11 条件文の分類の観点(右端のかたかなは分類番号)

時間的限定性		文の時間	従属節のモーダルな意味					
あり	個別的・一回的なできごと	非成立	未定のことから	まだ起こっていないこと		イ		
				発話時点においてわかっていないこと、知らないこと		ロ		
			既定のことから		/		ハ	
			事実と反することがら				ニ	
		成立	従属節のモーダルな意味	従属節と主節との関係			/	
				因果関係性		時間関係性		
			既定のことから	あり	契機的な関係を表わすもの・<きっかけ>	/		ホ
				なし	時間関係だけを表わすもの			継起的な時間関係を表わすもの・<連続>
						同時的な時間関係を表すもの・<認識・発見の状況>	ト	
		なし	反復的・習慣的なできごと	/				チ
一般的・普遍的なできごと	リ							

以上から、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が用いられた文の分析には、文の時間的な位置づけを手掛かりとした発話者のどのようなものとしてさしだしているかというモーダルな意味の側面、そのことからの因果関係性や時間関係性、表11には現れてこないが、形態論的・構文論的な特徴(同一主体・異なる主体、アスペクト形式)、動詞の分類(意志動詞・無意志動詞、認知・思考活動を表わす動詞など語彙的な意味、など)について考察する必要があること、また、どのような部分においてこうした

分析の観点が必要であるかということがわかった。

表 11 のような観点から、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が用いられた文をみることにより、これらの形式が現れる環境に違いがあることがわかる。表 12 に示す。

表12 「～と」「～たら」「～ば」「～なら」が用いられる文

<平叙文>				
分類番号	「～と」	「～たら」	「～ば」	「～なら」
分類番号イ				
分類番号ロ				1
分類番号ハ				
分類番号ニ				
分類番号ホ				
分類番号ヘ				
分類番号ト				
分類番号チ		2		
分類番号リ		2		

<実行文>				
			3	

1 「～するなら」は用いられていたが、「～したなら」はなかった

2 注 9)に記述したように数例の用例が採集された

3 注 6)に記述したように制限があるが用いられる

今回得られた分類は、この時点では「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式が現れる環境を示したものでしかなく、各形式の入れ替えができることを示したのではない。

「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式がどういう存在であるのか、どういうことを表わすために必要な形式であるのかということについては、

各形式を個別的に丁寧にみていかなければならないだろう。こうした点は今後の課題である。

4. 今後の課題

今回の分析により、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の各形式が現れる文が明らかになり、これらの形式をどのような観点から分析を進めればいいのかということについての提示ができたと思う。今後は動詞の条件形について個別に分析し、「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の各形式の特徴について考察していきたい。

今回、分析の対象から外した動詞の否定形の条件形、動詞以外（名詞述語や形容詞述語）の条件形についても分析をしなければならない。＜実行文＞に現れる「～たら」「～なら」についても、＜実行文＞におけるこの二つの形式の違いを明らかにしなければならない。

また、「～なら」に関しては、今回の分析にはおもてに出てこなかったが、従属節と主節との時間的な関係が「後前関係」になるものがあったり、従属節に既定のことがらをとる反事実的な条件を表わす文に用いられたり、他の形式とは異なる点が多い。また、直接名詞に接続する用法もある。こうした様々な問題を解決していかなければ、「～なら」の形式が一体どういうものであるのか明らかにはならないだろう。

「～と」「～たら」「～ば」「～なら」の形式の特徴をより明らかにするためには、今回は分析からはずした状況節的な用いられ方をしているもの、慣用的ないい方になっているもの、後置詞化しているもの、モダリティーの表現形式となっているものについても分析をしなければならないだろう。以上のように多くの課題を残している。さらに用例を採集して、常に表12の検証をしていく必要もあるだろう。

最後に、条件文は従属節と主節とからなり、こうした合わせ文には二つ以上のことがらが述べられている。そして、これらのことがらの関係を「～

と」「～たら」「～ば」「～なら」の各形式が担っている。一方、文はその対象的な内容とモーダルな意味とが合わさったものである。分析の観点を記述していくなかで、従属節においても、主節においても、条件文は、モーダルな意味の側面から分析することが必要であることが示されたように²²⁾、こうした点を踏まえて、条件文とは一体どういった文であるのか、今後分析を進めるなかで考えていきたいと思う。

注

- 1) 1993年頃までの条件表現の研究をまとめたものとして、有田節子(1993)がある。1993年以降も研究がおこなわれており、伊藤勲(2005)、中島悦子(2007)、有田節子(2007)、前田直子(2009)では、自身の一連の研究がまとめられている。
- 2) 従属節が<未定のことから>について述べられる場合の「～と」形式が特徴的であった。否定形には独自の意味が読み取れる。

ヒラメは、その時、ただこう言えばよかったのでした。

「官立でも私立でも、とにかく四月から、どこかの学校へはいりなさい。あなたの生活費は、学校へはいると、くにから、もっと充分に送って来る事になっているのです」(人間失格 75)

上は「～すると」の例である。下に挙げる「～しないと」の場合は、「否定的に(できごとの的にマイナスとなるようなことを)言うことで、相手にそうしないように(それとは違うことをするように)」といった喚起をうながす」という含意が読み取れる。

「この風なら、頑張れば、やってやれないことはない」

宮村はそう言って、雪の穴から立上がった。一昼夜の間に宮村はすっかり弱っていて、とてもこの風では無理だし、時間的にも不可能に考えられた。

「槍の穂に登るのは無理だ。だが、ピバークの位置を変えないと、このままでは凍え死んでしまう」

加藤はそう言って立上がった。どこか岩のかげの吹きだまりにでも雪洞を掘って風をさけようと思った。二人はザイルを組んだ。加藤が先に立った。(孤高の人)

子供たちが柔順に彼女の命令に服し、嫌な顔一つしないところは、全く雪枝という娘の持っている人徳の力であるらしかった。

「さあ、みんな、雑巾をしぼって、きれいに勝手の横の陽当たりに干したら、遅れないように学校へ行きなさい。ぼやぼやしては駄

目よ」

使うだけ使うと、雪枝は子供たちを解放し、鮎太に、
「あんたも早く学校に行かないと、遅くなるわよ」
と言った。(あすなる物語)

また、従属節が<未定のことがら>について述べられる場合、「～すると」よりも「～しないと」の用例の方が多く採集されている。

蓮沼昭子(1987)では、「～しなければ」の場合、合わせ文が「必要性」や「義務」を表わすモダリティー表現に近づくと言われている。こうした点などから、否定形の条件形について取り立てて分析を行いたいと思う。

- 3) 鈴木義和(1992)や丹羽哲也(1993)に述べられているように、「～なら」が直接名詞に接続する場合、従属節と主節との間に<因果関係性>があるものかないものがある(<因果関係性>のないものは、「選択のナラ」「主題のナラ」のように呼ばれている)。このため、「～なら」に関しては、「～と」「～たら」「～ば」とは異なる観点からの分析も必要であると考えられる。こうした点に関しては、「～なら」の個別の分析の際に行なうことにしたい。
- 4) 希求文を平叙文として扱うことは、工藤浩(1989)を参考にした。また、採集した用例に、希求文の例は分析できるほど現れなかったが、次のように小説の地の文に、主文が過去形の形で現れたものがあった。

魚津は、現場に行ってみなければ全く予想はつかなかったが、出来たら雄滝の向う側を登り、D沢通しにつめて、しゅう洞沢岳のコルに出ようと思った。多少野暮ったくはあったが、どうせ滝谷をやるなら、雄滝、雌滝のある下方から律儀にやってみたかった。D沢をつめて行くのは、単独行の場合、このルートが一番危険が少なく、成功率が多いように思われたからである。(氷壁 451)

命令文(本稿では、実行文と呼ぶ)が、基本的には地の文に用いられず、過去形の形で用いられることはないことから考えると、希求文を平叙文として扱ったほうが良いと判断した。

- 5) <平叙文>、<実行文>という分類に対して、工藤真由美(1995)の次の記述も参考としている。「ムードとは、基本的に、叙述法(断定法-推量法)と実行法(意志・勧誘法-命令法)の対立として示される、<事象(と現実との関係)に対する発話主体の態度の相違>である。叙述法は、発話主体の認識的態度を示し、断定=直接的認識と推量=間接的認識に、下位区分される。実行法は、発話主体の意志行為的態度を示し、意志・勧誘=自らの実行的態度と命令=相手への実行への要求的態度に、下位区分される」(p.47)。
- 6) 数例であったが、合わせ文の述語が実行文である「～ば」の例が採集された。
「用があれば、電話をかけるよ。」

「ここまでくれば、一人で帰れるよ。」

条件文が取りうるモダリティ形式については、仁田義雄(2006)の他、いくつか研究がある。それらによると、「～ば」が本稿でいう<実行文>に現れうることが指摘されている。しかし、<実行文>に現れる「～ば」は多くはなく、「～ば」の形式を用いるには制限があるようである。<実行文>にはもっぱら「～たら」「～なら」の形式が用いられる。

- 7) 「内的意識の提示部分」部分では、非過去形にかえ、あえて過去形を用いることで、作中人物の意識の<対象化>を行なうこともあり、このような用法を<描出話法>と呼んでいる。そのため、<描出話法>部分では、典型的<かたり>部分との境界が曖昧になるとしている。
- 8) 「～と」形式は、<かたりのテキスト>において、物語世界のできごとを描写する際に多く用いられていた。また、用法のバリエーションも多かった。
- 9) 「～たら」の形式が用いられている文は、基本的に、時間的限定性を受ける場合、つまり<個別的・一回的なできごと>を表わす文にしか用いられない。しかし、時間的限定性を受けないような例もわずかであるが採集された。

《バーでもてるには、ちゃんと法則があるのだ》

父は言った。

《お金がなきゃだめなんだろう。とすればお父さんは絶望的だね。

太郎はすかさず答えた。

《金も金だが、まず、バーへ行ったら、あまり笑ったらいかんのだ》

《へえ》(太郎物語 201)

「二十年やって帰って来て、店を開いても、死ぬまで、一日も店を空けないことができるか？」

「一日も……。夏、釣りに行くとか……」

「ダメだね。レストランは、責任者が現場を離れたら とたんにまずくなる。そしてコックは七十になったら、もう第一線をひかなきゃいけない」

「どうして？」(太郎物語 183)

- 10) 「過去 - 現在 - 未来」という時間の扱いは、基本的には<話し合いのテキスト>におけるものである。<かたりのテキスト>は、物語世界のできごとと間の時間関係の表わし方が<話し合いのテキスト>と違っており、物語世界のできごとの展開の現場(今)や、あるできごと時を基準軸とした相対的なテンス(先行 - 同時 - 後続)として時間が扱われる。しかし、この章では<話し合いのテキスト>での時間の扱いを中心に述べていくことにする。
- 11) 「～なら」形式には、本文で挙げた使い方だけでなく、従属節に<既定のことから>を述べて、合わせ文全体では事実と反することがらも述べることができ

る。他の形式ではできない。

彼は寂しそうに首を引っ込めて、薄べりのついた腰かけに腰をおろした。東京に行くのなら、おじさんはいなくても、稲葉屋に寄ってくればよかった。近所のおじさんや、おばさんにも、あいさつしてくるんだっけ、そんなことがつぎからつぎへと浮かんできた。(路傍の石)

- 12) 従属節に<事実に反することがら>を表現する場合の「～なら」形式は、他の形式と比べると、採集された用例は少なかった。しかし、「名詞+なら」形式のものは多く採集された。下は「名詞+なら」形式の用例である。

「こんなところで守備なんぞについていないで、重慶まで堂々と進行すべきだな。おれが司令官なら とうに命令を下しているな。不肖この佐久間は、そもそも作戦ということについてはひとかどの意見を持つてるのですぞ」(榆家の人びと)

「おふくろさん、それで黙ってるの？」

「『秋夫ちゃん、そんなこと言っちゃいけません』なんていうだけだしな」

「オレの弟なら、なおすの簡単だがな」

「どうする？」

「田舎へ連れて行って肥え溜の中に叩き込んでやる」(太郎物語 158)

- 13) 本文の表7でもあげたが、工藤真由美(1995)の、<現在>のできごととは<知覚>という認識の仕方とむすびつき、<過去>のできごととは<回顧(回想)>という認識とむすびつきという記述と通ずると考えられ、主節には<知覚や回顧(回想)>が述べられているといえるだろう。
- 14) 豊田豊子(1978、1979ab、1982、1983)の「と」に関する一連の研究など。しかし、本稿とは細かな点で分類に違いがある。
- 15) 先行研究の「発見」を、本稿で<認識・発見の状況>としたのは、「発見」という用語が、従属節と主節との関係を表わす用語としては不適切であると考えられたからである。
- 16) 後述しているが、<連続>の述語動詞は、従属節も主節も<意志動詞>で、「～と」の用例のみ採集された。しかし、仁田義雄(1987)は、<連続>において、主節の述語動詞が非意志的な動作である場合には「～たら」の形式も可能であると指摘している。

蒲団に入ったら、すぐにぐうぐう寝てしまった。(仁田義雄(1987)p.22より引用)

しかし、本稿では、上のような用例は<きっかけ>に分類した(「同一主体：従属節の主体によることがらの成立により、その主体に無意志的な変化・動きが

起こる場合」に分類。表 10 を参照してほしい)。結果、<連続>には、「~と」の形式しか用いられず、従属節も主節も<意志動詞>で<同一主体>(主体の異同については、本文に後述)という特徴を持つ用法として分類できた。

<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>に関する分類には、先行研究間においても、本稿との比較においても多少ずつ違いがある。こうした点に関しては、今後はっきりさせなければならない。

- 17) ここでは、<因果関係性>と<時間関係性>という点から分析しているが、複数のできごとは時間関係をぬきに因果関係を考えることはできない。時間関係を考えるとすると、潜在的に因果関係性を含んでいるといえる。言語学研究会・構文論グループ(1988)や工藤真由美(1995)にも、時間関係を表わす従属複文に因果関係性が含まれてくることについて指摘がある。

合わせ文に<成立していることがら>を表現する場合、「~と」「~たら」の形式による合わせ文が用いられる。「~と」「~たら」の形式による合わせ文は、一般的には条件表現の形式であるといえるが、<因果関係性>のない場合もあり、分析には従属節と主節のことがらの間の<因果関係性>の有無という点が問題となってくる。<因果関係性>のない場合の合わせ文は、従属節と主節の二つことがらの時間関係を表わしているのだが、上述したように潜在的には<因果関係性>も含んでいる。しかし、それが表面化してきていないのである。

この<因果関係性>と<時間関係性>との関係といった点や、本文のこれ以降の分析で述べるが形態論的・構文論的な特徴や動詞の分類という点などにおいて、<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>の用法には重なりがあり、これらの用法間に連続性があるといえるだろう。

- 18) <きっかけ>の場合、従属節と主節の述語動詞のアスペクト形式は「完成相+完成相」となる場合がほとんどである。しかし、「継続相+完成相」となっているものも少数ではあるがあった。従属節と主節の述語動詞のアスペクト形式が「継続相+完成相」の場合、<認識・発見の状況>に分類されるものがほとんどなのであるが、下の用例のように、従属節のことがらが主節のことがらの成立に関わるようなもの(つまり、<因果関係性>のあるもの)は、<きっかけ>に分類した。

そして二杯目の番茶を自分でついでいると、

「灰皿ですよ。お父さん」と修一が注意した。

信吾はまちがえて灰皿にお茶を入れていた。(山の音 92)

暮れに呉服屋の勘定を払ってもらってから、葉子は畑から一文も受け取ったことはないのである。ばかばかしいから、しつこくかかって来る電話に出ないでいると、やがてべるべりに酔っ払って入って来た。(花影 102)

信吾の部屋つきの英子までがその女に会っていて、修一の家族がその女を知らないのは、世間通例のことなのだろうが、信吾は納得がゆかなかった。殊に英子を目の前に見ていると、なお納得がゆかなかった。(山の音 74)

これらの用例は、従属節と主節の同時性を表わしているというよりは、従属節のことがらは<継続相>の形をとって時間に幅のある動作を表わしていることとらえることができる。その時間的に幅のある動作がきっかけとなり、主節のことがらが引き起こされたと考えることができる。

- 19) 豊田豊子(1978)も「連続」になる一つの条件として、同一主語で、「意志動詞 + 意志動詞」を挙げている。さらに、「無意志動詞 + 無意志動詞」の場合も「連続」になると述べられているが、今回は「無意志動詞 + 無意志動詞」の用例は採集されなかった。豊田豊子(1978)でも「ドングリはころころ転がると、池に落ちた」という作例しか挙げられていない。

- 20) 用例数は少ないが、<継続相 + 継続相>の用例も採集された。

「ところでこう広いところで2人でしゃべっていると、声はやたらと響いてすごい秘密をしゃべっているみたいね！」

「秘密だってばさ」

私は笑った。(N・P 89)

- 21) こうした条件文の分類に対して、先行研究によって名称に多少の違いはあるが名称がつけられている(下記、右側)、本稿の分類(下記、左側)を当てはめると、一応は次のようになる。

分類番号 イ・ロ……………未定の仮定条件文

分類番号 ハ……………既定の仮定条件文

分類番号 ニ……………反事実的な条件文

分類番号 ホ……………事実的な用法、確定条件文(きっかけ)

分類番号 ヘ・ト……………事実的な用法(連続、認識・発見の状況)

分類番号 チ……………反復的・習慣的なできごとを表わす条件文

分類番号 リ……………一般的・普遍的なできごとを表わす条件文

しかし、従属文が未定のことがらを表わす場合(分類番号イ・ロ)、「～と」形式は分類番号ロには用いられない点や、従属文が既定のことがらを表わす場合(分類番号ハ)「～なら」形式によって反事実的な条件を表わすことができたり、「～なら」形式には従属節と主節のことがらの時間的な関係が後前関係のものがあったり(下の用例)と、まだまだ個別の形式の分析を進めなくては、イ～リの分類に対して名称を与えることはできないため、本稿では保留にしておく。

「君、本当に高校生か」

「高校三年よ」

「仕方がない、酒を飲みに行こう。その口紅を落としたまえ」

「お酒を飲みに行くなら、口紅は落とさない方がいいわ。それから、仕方がないことはないでしょう。男は、いっぱいあたしを追いかけてくるわ。おじさんだって、あたしと一緒に行くこと嬉しいでしょう」(砂の上の植物群)

- 22) 高橋太郎(1993)においても、「条件形・譲歩形は、中止形とちがって、モーダルな側面をもっている。つまり、条件形・譲歩形のさししめすことがらが現実とどんな関係があるかが、このかたちをとおして、はなし手によって、しめされるのである」(p.243)と述べられており、「その条件をその文のそとにある現実とむすびつけるはたらき」(p.243)があるとしている。

参考文献

- 有田節子(1993)「日本語条件文研究の変遷」 益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版に所収
- 有田節子(2007)『日本語条件文と時制節性』くろしお出版
- 伊藤勲(2005)『条件法研究』近代文芸社
- 遠藤(宮部)真由美(1997)『現代日本語の条件文の研究』横浜国立大学大学院教育学研究科提出修士論文 未発表
- 奥田靖雄(1986)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 - その体系性をめぐって - 」『教育国語』87、教育科学研究会・国語部会編
- 奥田靖雄(1996)「文のこと - その分類をめぐって - 」『教育国語』2-22、教育科学研究会・国語部会編
- 工藤浩(1989)「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国大学論集』39
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト - 現代日本語の時間の表現 - 』ひつじ書房
- 言語学研究会・構文論グループ(1985a)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(一) - その1・まえがき - 」『教育国語』81、教育科学研究会・国語部会編
- 言語学研究会・構文論グループ(1985b)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(三) - その3・条件的なつきそい・あわせ文 - 」『教育国語』83、教育科学研究会・国語部会編
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 鈴木義和(1992)「提題のナラとその周辺」『園田学園女子大学論文集』26
- 高橋太郎(1993)『動詞 九章』ひつじ書房
- 豊田豊子(1978)「接続助詞「と」の用法と機能()」『日本語学校論集』5、東京外国語大学国語学部附属日本語学校

- 豊田豊子(1979a)「接続助詞「と」の用法と機能()」『日本語学校論集』6、東京
外国語大学国語学部附属日本語学校
- 豊田豊子(1979b)「発見の「と」」『日本語教育』36、日本語教育学会
- 豊田豊子(1982)「接続助詞「と」の用法と機能()」『日本語学校論集』9、東京外
国語大学国語学部附属日本語学校
- 豊田豊子(1983)「接続助詞「と」の用法と機能()」『日本語学校論集』10、東京
外国語大学国語学部附属日本語学校
- 中島悦子(2007)『条件表現の研究』おうふう
- 仁田義雄(1987)「条件づけとその周辺」『日本語学』6-9、明治書院
- 仁田義雄(2006)「条件表現と叙述世界のタイプ」 益岡隆志 他編『日本語文法の新
地平 3 複文・談話編』くろしお出版 に所収
- 日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版
- 丹羽哲也(1993)「仮定条件と主題、対比」『国語国文』62-10、京都大学文学部
- 運沼昭子(1987)「条件文における日常的推論 - 「テハ」と「バ」の選択要因をめぐ
って」『国語学』150
- 前田直子(2009)『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版

用例の出典(本稿に引用した用例の作品のみ挙げる)

『あすなる物語』	井上靖	新潮文庫
『あのポプラの上が空』	三浦綾子	講談社文庫
『一瞬の夏』	沢木耕太郎	新潮文庫
『受け月』	伊集院静	文春文庫
『海辺の扉・上』	宮本輝	角川文庫
『海辺の扉・下』	宮本輝	角川文庫
『女坂』	円字文子	新潮文庫
『回転木馬のデッド・ヒート』	村上春樹	講談社文庫
『花影』	大岡昇平	新潮文庫
『黒い雨』	井伏鱒二	新潮文庫
『孤高の人』	新田二郎	新潮文庫
『事件』	大岡昇平	新潮文庫
『砂の上の植物群』	吉行淳之介	新潮文庫
『太郎物語』	曾野綾子	新潮文庫
『痴人の愛』	谷崎潤一郎	新潮文庫
『榆家の人びと』	北杜夫	新潮文庫
『人間失格』	太宰治	新潮文庫
『花の降る午後』	宮本輝	角川文庫

『氷壁』	井上靖	新潮文庫
『葡萄と郷愁』	宮本輝	角川文庫
『冬の旅』	芹沢光治良	新潮文庫
『山の音』	川端康成	新潮文庫
『友情』	武者小路実篤	新潮文庫
『路傍の石』	山本有三	新潮文庫
『N・P』	吉本ばなな	角川文庫
『TUGUMI』	吉本ばなな	中公文庫